

るなど、日比文化交流の大きな活動を見せている。また同年のマレーシア語専攻は、二年生があきらめた後、上級生有志が急遽名乗りを挙げ、超特急の準備で見事に上演にまで漕ぎ着けて、さすがにキャリアが違うと印象づけた。タイ語専攻のケースを付け加えれば、ここでは例年二回の語劇合宿が行われており、上級生・卒業生もこの合宿には参加して後輩をバックアップしている。毎年の公演を実現しているところはとここで、それ相応の態勢があることが分かる。

われわれは国策の最前線だった。その時代により、文明開化の最前線に、大東亜共栄圏の最前線に、高度経済成長の最前線に先兵を送り出してきた。しばしば泥縄であったのは最前線だったからだ。問題は、今もわれわれが最前線にいるか否か、だろう。東京外国語大学外国語学部東南アジア課程八専攻語の歴史をたどり終えての感慨である。

附 オランダ語

オランダ語教育のスタート

本学の馬來語学科がそれまでの速成科から本科に昇格したのは一九一一（明治四十四）年のことであった。このことは日本人の東南アジアへの進出がいよいよ本格化し、その性格も大きく変わりつつあったことを示している。従来は「からゆきさん」とか「娘子軍」といわれた婦女子が流れ流れて行く果てが東南アジアであったとすると、日露戦争後は商人や企業家の経済的進出が次第に目立つようになっていった。一九〇九（明治四十二）年にはバタヴィア（現ジャカルタ）に日本領事館が開設され、一九一二（明治四十五）年には三井物産がスラバヤ（ジャワ）に進出している。そしてその翌年の一九一三（大正二）年には南洋郵船会社が日本とジャワの間に直通の航路を開設している。

東南アジアでマライ語（マレー語）が通用する地域といえは当時は大きくわけて英領マライ（および海峽植民地シ
ンガポール）と蘭領東インド（いわゆる蘭印）であり、それぞれイギリスとオランダの植民地支配を受けていた。し
たがって商人や企業家が現地で事業を展開する場合、マライ語の知識はもとより、植民地宗主国の言語である英語、
オランダ語の知識も必要とされたことはいうまでもない。こうした事情は当時の本学の関係者にも十分認識されてい
たようで、本科に昇格した馬來語学科では第二次以降、オランダ語を選択履修できるようにはじめから学科目に蘭
語（オランダ語）が組み込まれていた。このように本学におけるオランダ語教育は、本学のルーツと目される幕府の
蛮書調所において大きなウエートを占めていた蘭学研究とははつきりと断絶した形で、マライ語教育の開始と同時に
新たにスタートをきったということが出来る。以下、本学におけるこのオランダ語教育の歩みを追ってみることにし
たい。

馬來語学科では、本科に昇格して二年目の一九一二（明治四十五）年からオランダ語の授業が予定どおり始まった
らしく、教授村上直次郎がはじめてオランダ語担当として職員録に載っている。村上は日欧交渉史の専門家で、一九
〇〇（明治三十三年）年からスペイン語担当の任にあったが、馬來語学科の発足とともにオランダ語に移り、一九一八
（大正七）年まで七年間初代のオランダ語担当教官を務めた。村上はすでに一九〇八（明治四十一年）年から本学の校
長でもあったから、本学のオランダ語教育は最初から校長直々の指導という荣誉に浴していたことになる。村上は一
八九九（明治三十二年）年から一九〇二（明治三十五年）年にかけてスペイン、イタリア、オランダに留学しており、オ
ランダ語はこの時に身につけたと思われる。のちに村上は『長崎オランダ商館の日記』全三卷（岩波書店、一九五八
年）や『バタビヤ城日誌』全三卷（東洋文庫、一九七〇―七五年、その抄訳は一九三八年）の翻訳者として知られて
いる。また一九一五（大正四）年からは村上のほか、佐和山彌六がオランダ語担当の講師として加わり、スタッフ

は二人となった。佐和山は一九〇九（明治四十二）年に本学の露語（ロシア語）学科を卒業後、外交官となり、オランダおよび蘭印で在外勤務についており、その折にオランダ語を学んだのであろう。しかしどのような経緯で本学の教壇に立つことになったのか、その辺の事情はよくわからない。佐和山は村上と同じく一九一八（大正七）年まで講師を務めている。この二人がどのように授業を分担し、どのような教材を用いていたのか、また当時何人くらいの学生がオランダ語の授業を受けていたかについては記録がなく、あきらかではない。ただ当時は、馬來語学科の入学定員は約一五人で、しかも隔年募集であったから、全員がオランダ語を履修したとしても、人数としてはそれほど多くはなかったと思われる。それからこの時期には、まだオランダ語の外国人教師ないしは講師は採用されていない。

オランダ語担当スタッフの充実

オランダ語担当のスタッフが一新されるのは一九一九（大正八）年のことである。校長村上直次郎が東京音楽学校長に転じたのにあわせて佐和山も辞職し、代わってドイツ語教授辻高衡が独語および蘭語（オランダ語）主任を兼ねることになる。辻は一九一七（大正六）年から一九二八（昭和三）年までドイツ語の教授を務めた人で、蘭語主任はわずか一年しか兼任していない。辻は一九〇五年から一九一六年まで一〇年以上にわたってベルリン大学付属東洋語学校の教師を務めていたが、彼のオランダ語歴についてはよくわからない。この一九一九年にはまた馬來語学科第三回卒業生（一九一八〔大正七〕年）の朝倉純孝がオランダ語担当の講師として採用されている。これはいわば本学はえぬきのオランダ語担当者の誕生ということになる。そしてこの年になってはじめてオランダ人講師が任用されて、J・H・クローネマンとJ・ウェステンドルフの二人が同時にオランダ語の講師になっている。この翌年にもやはりオランダ人二人の態勢がとられている。ただしウェステンドルフに代わってJ・M・W・オクセンドルフがあらたに採

用されている。このようにスタッフが強化されたのは、この年からオランダ語は第一年次でも選択履修できるように学則が改められたことと、修業年限一年以内の速成科があらたに設けられたことが関係しているようである。授業時間数もまた大幅にふやされている。また一九二七（昭和二）年からは修業年限が四年になるとともに馬來語部（語部への改称は一九一九「大正八」年から）では外国語乙（英語）のほかにさらに第二外国語としてオランダ語が週二―三時間の必修科目に加えられた。また外国語乙としてオランダ語を週に八―十三時間履修する課程も設けられている。このように馬來語部の中で次第にオランダ語のウエートが大きくなってきていることがわかる。

朝倉は、翌一九二〇（大正九）年には早くも蘭語主任として助教授に昇任し、以後一貫して本学のオランダ語教育において中心的役割を担ってゆく。一九二三（大正十二）年十二月から二年間文部省の在外研究員としてオランダ、ベルギー、アメリカで研究に従事して帰国すると、一九二六（大正十五）年には教授に昇任し、今度は馬來語部主幹、蘭語および馬來語主任として語部の責任者をも務めることになる。

この時期、外国人教師も引き続き採用されているが、一つだけ珍しい点は、ベルギー人が相次いでオランダ語を担当していることである。一九二六（大正十五）年から二七（昭和二）年にはブリュッセル大学のシャルル・ソプリーが、一年おいて一九二九（昭和四）年から三〇年にはパウル・ペーが担当している。この二人はオランダ語のほかにフランス語とドイツ語もあわせて担当しており、いかにもベルギー人らしい。この三つの言葉が公用語になっているベルギーならではのことであろう。こうしたベルギー人の採用は、朝倉がベルギーで在外研究中に築いた人脈に負っているものと思われる。本学でベルギー人がオランダ語を担当したのは、長い歴史の中でもこの二人だけである（ただしフランス語を担当した人は別にいる）。

すでにふれたように、一九一九（大正八）年から本学には修業年限一年以内の速成科が設置された。マライ語とな

らんでオランダ語もこの速成科で学べるようになった。マライ語では一九二一年（大正十）年三月に第一回修了者四名が出ている。オランダ語では一九二七年（昭和二）年に第一回の修了者五名が出ており、引き続き第二回（昭和三）三名、第三回（同四）七名、第四回（同六）三名、第五回（同七）二名、第六回（同八）三名、第七回（同九）七名、第八回（同一一）三名、第九回（同一三）一〇名、第一〇回（同一四）五名、第一一回（同一五）四名、第二一回（同一六）二名というように修了者が出ている。一九四二年（昭和十七）年以降については記録がなく不明である。第一回の修了者の中には、後に日蘭交渉史や東南アジアの日本人町の研究で新生面を切り開いた岩生成一（一九〇一—八八、東大元教授）の名がみえるし、第二回の修了者の中にはやはり歴史学者で東京商科大学元教授の幸田成友（一八七三—一九五四、幸田露伴の弟）がいる。また第八回の修了者の中には、東洋史学の研究で一九九八年（平成十）年の文化勲章を受賞した山本達郎（一九一〇—、東大名誉教授）がはいっている。

戦前・戦中の朝倉の業績

教授朝倉純孝は、戦前戦中を通じて語学関係書や翻訳を数多く世に送り出している。一九三二年（昭和七）年には本学の初等用教科書として『和蘭語教科書』（春陽堂）を出したのを皮切りに、一九三六年（昭和十一年）年には『和蘭語四週間』（大学書林）、翌一九三七年（昭和十二年）には公爵徳川義親との共著『馬來語四週間』（同）、さらに一九四一年（昭和十六）年には『自修蘭印馬來語』（タイムス出版社）と『実用オランダ語会話』（大学書林）を著わしている。とくに『和蘭語四週間』は毎年のように版を重ね、一九四一年（昭和十六）年までに七版七〇〇〇部を数えている。一九四二年（昭和十七）年に日本軍が蘭印を占領すると、オランダ語への関心も盛り上がったようで、この年だけでも八版、九版と続いて六〇〇〇部も出ている。一九四一年（昭和十六）年には、このほかに『馬來語基礎単語四〇〇〇語』



朝倉純孝

も近刊予告が出ているが、実際に出たのかどうか確認はできない。また拓殖大学南親会が一九四三（昭和十八）年に編纂発行した『蘭日辞典』にも編纂委員会顧問として名をつらねている。

翻訳として注目されるのは、太平洋戦争開戦直後の一九四二（昭和十七）年二月に出た、ミユリタテユリ著『蘭印に正義を叫ぶマックス・ハーフェラー』

（タイムス出版社）である。これは近代オランダ文学の最高傑作の一つに数えられている大変有名な小説で、十九世紀のオランダの苛酷な植民地支配の内情をオランダ人自ら内部告発したもので、多くの国の言葉に訳されている。原著のタイトルはただ「マックス・ハーフェラー」（この小説の主人公の名）であるが、これに「蘭印に正義を叫ぶ」といういわくありげな一句をつけ加えたところに訳者朝倉がこの翻訳に込めた思いと意気込みが伝わってきた。そしてまるでこれに呼応し「蘭印に正義を叫ぶ」かのように日本軍は翌三月の一日にジャワに侵攻し、わずか八日間で蘭印を制圧してしまった。日本の文部省と文部大臣は当時日本とオランダは敵国関係にあったにもかかわらず、この敵国の文学書の翻訳を推薦図書に指定したとのことである。またこの翻訳は、当時の日本出版文化協会の推薦図書にもなったといわれている。

外専時代のオランダ語教育

一九四四年からスタートする三年制の東京外事専門学校については資料が乏しく、不明なところが多いが、馬來語部はマライ科に名称を変更しただけで、組織やスタッフの大枠は基本的には変わらなかったようである。一九四七年の資料によると、授業時間は一年次のみがマライ語週八時間、オランダ語週四時間とちがっているだけで、二年次、三年次になるとどちらも週四時間ずつと同じ時間数になっている。オランダ語は選択科目ではなく必修となつていたと思われる。また速成科も従来通り設けられており、マライ語部および蘭語部という名称になっていた。この時期オランダ語担当のお雇い外国人教師としてヘルマン・アピンハが一九三九（昭和十四）年から一九四六（昭和二十一年）まで教壇に立っているが、戦争中には、とりわけオランダと日本は敵国関係にあつたことから、あらぬ嫌疑をかけられたりして、人知れぬ御苦労も数多くあつたようである。

戦後のオランダ語教育

一九四九（昭和二十四）年に発足した新制の東京外国語大学では、マライ科はインドネシヤ学科と改称された。専攻語学としてはマライ語とオランダ語の二つが必修とされ、単位数はどちらも同じであつた。前期の第一年次、第二年次においてはマライ語、オランダ語とも八単位（週四コマ）が必修となり、後期の普通講義、演習、特殊講義においても必修単位数はマライ語、オランダ語とも全く同じであつた。このように新制大学発足とともにオランダ語はマライ語と対等の扱いをうけることになつた。しかしその後、両者の比率が変えられ、第一年次では五対三、第二年次では四対三というようにマライ語の必修単位数がオランダ語よりも多くなつた。正確にはいつからこのように変更されたか残念ながらわからないが、インドネシヤ学科である以上こうした変更は早晚やむをえないことだったのである。

う。独立を達成したインドネシア共和国は一九五六（昭和三十一年）五月には、オランダとの間に結んだハーグ協定を破棄して、オランダとの連合を解消するに至るが、こうした国際的な動きも関係があったかもしれない。

インドネシア学科発足とともに教授朝倉純孝が引き続き学科主任を務めた。朝倉は一九五六（昭和三十一年）三月に停年退官するが、一九六三（昭和三十八）年三月まで七年間非常勤講師としてそのまま教壇に立った。したがってこの年をもって本学のオランダ語教育に一時代を画した朝倉の長い時代は終わったといつてよいであろう。一九五六（昭和三十一年）年に本学の名誉教授規程が制定されると、朝倉は初代学長の沢田節蔵とともに名誉教授に推薦された。一九六八（昭和四十四）年には勲三等瑞宝章を受けた。

戦後も朝倉は、いくつかの語学書を精力的に著わしている。順に挙げると、『インドネシア語四週間』（大学書林、一九五二年）、『オランダ語入門』（元々社、一九五六年）、『オランダ語常用六〇〇〇語』（大学書林、一九五九年）、『インドネシア語小辞典』（同、一九六四年）、『英語対照インドネシア語会話』（同、一九六九年）、『オランダ語四週間（改訂第一版）』（同、一九七一年）、『オランダ語会話ハンドブック』（同、一九七五年）、『オランダ文学名作抄』（同、一九七七年）などである。朝倉は一九七八（昭和五十二年）年に八十五歳で他界したが、一九八〇年には『オランダ黄金時代史』（大学書林）が、一九八三年には『オランダ語文典』（同）がそれぞれ遺作として出版されている。

オランダ語担当者として一九五〇（昭和二十五年）年に渋沢元則が助手に就任し、オランダ語担当の日本人スタッフは当面二人になっている。渋沢は一九四三（昭和十八）年に馬來語部を卒業しているので、はえぬきのオランダ語担当者としては二代目ということになる。渋沢は一九五五（昭和三十）年に講師、一九五八（昭和三十三年）年に助教、一九六四（昭和三十九）年に教授に昇任し、この間一九六〇（昭和三十五年）年から一年間オランダのエトレヒト大学に留学している。渋沢の業績として特筆すべきは、十六世紀末にアジアに乗り出してきたオランダ人の難解な航海日

記を翻訳していることである。一つはリンスホーテンの『東方案内記』（大航海時代叢書Ⅶ、岩波書店、一九六八年）で、もう一つはハウトマン、ファン・ネックの『東インド諸島への航海』（大航海時代叢書第Ⅱ期第一〇巻、岩波書店、一九八一年）である。渋沢は一九八一年三月に停年退官するまで本学のオランダ語教育に尽くした。同年名譽教授に推薦され、一九九二（平成四）年春には勲三等瑞宝章を授与されている。渋沢の後任として、インドネシア科一九六五（昭和四十）年卒業の佐藤弘幸が赴任して、現在に至っている。

必修科目から選択科目へ

オランダ語教育が思わぬアクシデントに見舞われたのは一九七三（昭和四十八）年のことであつた。この年一部の学生がインドネシア語学科の専攻語学からオランダ語をはずして、全て選択科目にするように強く要求し始めた。学生の要求は、単に負担の軽減をはかることではしかなかつたようであるが、第一年次から新しい言葉を二つ同時に必修の専攻語として学んでゆくのは、当時としてはインドネシア語学科だけであつたから、他語科とのバランスをとるという意味で、結局は学生の要求に応えざるをえなくなつた。同年の教授会決定を経て、翌一九七四（昭和四十九）年から履修方法が変えられた。これによりオランダ語関係の科目は全て後期での選択科目になつた。ただしオランダ語初級は希望さえすれば第二年次から履修できることになつた。またこれを機にオランダ語概論（初級・上級）は全学的に開放され、他語科の学生も履修可能となつた。

こうした変更はたしかに学生にとっては負担の軽減とはなつたが、その反面失われたものも小さくはなかつた。インドネシアの地域研究を歴史的に少しでも深めてゆこうとすれば、今でもオランダ語文献は避けて通れないものとなつており、オランダ語の知識はどうしても必要になる。三五〇年近くに及んだオランダの植民地支配は、その意味で

も今もってさまざまな面でインドネシアに重くのしかかっていると云わなければならぬ。一先学（一九五三）「昭和二十八」年インドネシア科卒業の次のような発言は、改めてわれわれにこの問題の大きさを訴えかけているようである。「インドネシア共和国は独立したが、外大にはかつての植民地時代の名残りのオランダ語教育が行われているというような主張もあった。学生は闘争によりオランダ語を選択化することによって勝利？をおさめたかのようなのであるが、果してこの時代的条件による主張はあれでよかったですか」（『インドネシア研究論叢 伊東・渋沢両教授退官記念論集』、一九八一年、一五一ページ）。しかし残念ながらインドネシア語専攻の学生の中でオランダ語を選択履修する人の数は、年々減りつつあるのが現状である。

他方では、オランダ語をインドネシア語学科から切り離して独立させようという動きは何度かあった。一九六四（昭和三十九）年には定員一五名のオランダ語学科を新設することが教授会で決定され、文部省もこれを認めたが、結局大蔵省の査定で予算化されず、実現しなかった。

オランダ語担当の外国人講師は、戦後の一九四六（昭和二十一）年以来しばらく採用されていなかったが、一九五二（昭和二十七）年からはほぼ途切れなく採用されてきている。さまざまな事情から一二年間で交替する場合が多いが、S・ウィールシンハのように一九六二（昭和三十七）年から一〇年余も務めた講師もいる。またこの時期にオランダ事情についての講義があらたに開設されていることは特筆すべきことであろう。一九六四（昭和三十九）年から一〇年間にわたり栗原福也（東京女子大学名誉教授）が歴史を中心にオランダの事情について講義を担当し、インドネシア語科の学生に対してオランダへの関心を喚起するとともに、オランダ語の知識の必要性をあらためて認識させることになった。

西暦二〇〇〇年は、オランダ船リーフデ号が偶然に九州に来航して四〇〇年の記念の年にあたり、オランダは西洋

諸国の中では日本とはもつとも付き合ひの長い国となっている。先にも触れたように本学のルーツの一つと目される
 蜜書調所ではオランダ語研究は大きなウエートを占めていた。しかしそれにもかかわらず、本学一〇〇年の歴史の中
 ではオランダ語教育は残念ながら必ずしも十分に恵まれた場所を与えられてこなかったように思われる。

オランダ語担当の外国人教師および講師

- 一九一九（大正八）年 J・H・クローネマン、J・ウエステンドルフ、一九二〇（大正九）年 J・H・クローネマ
 ン、J・M・W・オクセンドルフ、一九二一（大正十）年 W・バツケル、一九二二（大正十一）年 一九二三年
 J・フェインストラ・カイペル、一九二四（大正十三）年 一九二五年 D・ファン・ヒンローペン・ラベルトン、一
 九二六（大正十五）年 一九二七年 C・ソブリ、一九二八（昭和三）年 J・B・スネレン、一九二九（昭和四）
 年 一九三〇年 P・ペー、一九三一（昭和六）年 J・B・スネレン、一九三三（昭和八）年 一九三八年 J・A・
 カンタ、一九三九（昭和十四）年 一九四六年 H・アピンハ、一九五二（昭和二十七）年 一九五五年 C・V・メウ
 レマンズ、一九五六（昭和三十一年）年 C・アウエハント、一九五七（昭和三十二年）年 一九五九年 J・A・ウーマ
 ンス、一九六〇（昭和三十五年）年 一九六一年 M・J・メイヤー、一九六一（昭和三十六）年 J・W・ル・ポール、
 一九六二（昭和三十七）年 H・ドゥ・フリース、一九六二（昭和三十七）年 一九七三年 S・ウィールシンハ、一
 九七七（昭和五十二）年 一九七九年 J・ドゥ・フリース、一九八〇（昭和五十五）年 一九八四年 J・スホルテン、
 一九八四（昭和五十九）年 一九八七年 E・フェネマ、一九八七（昭和六十二年）年 P・ポスト、一九八七（昭和六
 十二）年 一九八九年 F・ファン・レーウエン、一九九〇（平成二）年 一九九二年 J・スタルパース、一九九三
 （平成五）年 一九九六年 J・ドゥ・モス